



信州大学



全学教育機構ニュースレター

第 13 号

SGE 随想 ⑬ 精神の美学について

山口 和彦 英語教育部門 教授 (言語教育センター長)

柴田錬三郎の「首相は空を上げ」というエッセイに、ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』の終幕シーンが引用されています。愛するロクサーヌに自身の想いを打ち明けることのないまま、主人公が彼女に看取られつつ息絶える場面です。

……致命傷を負ったシラノが、襲い来る死神と闘った果てに、「おれのすべてをくれてやる。みんな持って行け。しかし、ただひとつだけ、貴様らに絶対に奪われないものがあるぞ」と言い、ロクサーヌが、「それは、なんなのですか?」と訊くと、「それはな、このおれの心意気だ!」とこたえておいて、事切れる。
私がいちばん好きな場面である。¹

シラノのこういう生きざまを愚かと嗤う人もいるかもしれませんが。しかし柴田は、シラノの“心意気”を彼の生の証徴とみなし、そこに精神の貴族主義としてのダンディズムの顕現をみているのです。

眠狂四郎ものをはじめ多くの時代小説を著した柴田は、大衆小説を書く理由のひとつに、主人公の“心意気”を描くことができる点を挙げ、“心意気”には「物質欲の料簡がみじんも含まれていない」²と書いています。そして「金が万能である、というおぞましい風潮が、戦後三十年目に、ようやく、その金によって殆ど決定的なダメージをくらう、という皮肉な現象をもたらしているいま、

どうやら、『心意気』というものが必要になって来た模様である」と筆をすすめて、信濃の武将真田幸村の逸話を紹介しています。

のぶただ
……大阪冬の陣に、幸村の叔父真田隠岐守信尹が、家康の内意を受けて、大阪城の幸村を訪ねて来て、秀頼を生捕りにして、味方に降って参れば、信濃国の数郡三万石を与えよう、とつたえると、幸村は、冷笑して、これをことわっている。信尹が、再度、訪ねて来て、信濃一国を与えれば味方になるか、と家康公が仰せられているがどうだ、とさそった。

幸村は、きわめて、無表情で、信濃一国はおろか日本の国半分を呉れてやる、と云われても、後世に汚名をのこすような卑劣なまねはできぬ、としりぞけているのである。³

このような“心意気”は、しかし文芸作品や戦国武将にのみ見られるものではありません。わが国の花柳界にも存在したことを、たとえば九鬼周造の『いきの構造』によって知ることができます。九鬼によれば、“いき”とは「運命によって『諦め』を得た『媚態』が『意気地』の自由に生きる」⁴ことですが、これは花街の厳しい現実を生きた女性たちの、もうひとつのダンディズムとも呼ぶべき心組みでしょう。

柴田のエッセイは40年前、九鬼の著作は85年前に物されたものですが、“心意気”といい、“意気地の自由”といい、その価値は少しも色褪せてはいません。いやそれどころか、拝金主義や功利の原則が幅を利かせる21世紀の今日を生きる私たちにとって、こうした精神の美学の価値は改めて問い直してみるべきものかもしれません。柴田は「滅びには美学がある」と題した別のエッセイで、美学は「べつに、滅びゆく者だけが、示すのではない」と述べ、こう記しています。

「美学」というのは、何も、大学の研究室や教室にあるのではなければ、評論家や作家だけが論じる、形而上のしろものではない。

(中略)

「美学」は、自分自身の人生の中に、常に存在しているのである。⁵

(注1~5は5頁に掲載します。)

★目次★

SGE 随想 ⑬ 山口和彦	1頁
トピック 第6回国際交流セミナー	2頁
スポットニュース (5件)	3頁~5頁
第5回NHK大学セミナー in 信州大学	
松岡俊裕教授、佐々木寛教授が定年退職 他3件	
私の研究 XIII 佐々木 寛	6頁~7頁
チャレンジ教育 13 花崎一夫	8頁

トピック 第6回国際交流セミナー

奉 鉦京 英語教育部門 准教授

平成 26 年 10 月 10 日、イギリスのバークレイズ銀行で Managing Director であるカーロ コグリアティ博士 (Dr Carlo Cogliati) を講師にお迎えし、第6回国際交流セミナーと第 73 回フレッシュキャンパスセミナーを共同開催しました。



講演は「哲学者である金融家が診る金融スキャンダルの真相と金融業界の倫理・道徳」という題で、国際的に活躍している講師の経験を踏まえながら、考える人は生き残れる術などを分かりやすく解説していただきました。

この講演で講師の狙いの一つはソクラテスの考察に基づいた「学ぶ機会」を与えることでした。ソクラテスの考察というのは誰かに何かを教えることはできないが、ただ、考えさせることしかできない。つまり「考えるようにすることしかできない」ということです。例えば、問いかけをすると同時に可能な答えも提示し、その答えは全て、矛盾や不備な点が含まれている。その矛盾や不備な点または問題を含まない答えに辿り着くことです。それは「考える」ことの重要性である知識と理解、理解と説明の間のギャップを埋めるのが「考えること」です。

この講演では、近年の金融業界を襲った金融スキャンダルについて学び、理解し、そして、考えることで、そのようなことが二度とおきないように、ある方法を確立させるため、「金融業界における倫理・道徳について、どう思いますか？」という問いかけに聴衆と共に考えていくような形式でセミナーが進行されました。

紹介された金融スキャンダルはロンドン銀行間貸借取引のレート操作、FX 操作、ダークプールなどで、金融業界において信用はどう取り戻すのかという問いかけに、個人レベルでの責任感と個人的価値観へ問いかける必要があると述べられました。関連する 3 つの問い、①「金融業界内の倫理的な次元は必要なのか?」、②「道徳的に良い銀行はあり得るのか?」、③「お金と倫理は共存できるのか?」に対して一緒に考えて、聴衆参加形式でセミナーが進行され、聴衆の考えに加え、講師の主張などが述べられました。終わりに、お金と倫理・道徳の融合は可能だという主張を述べた上で結論付けられました。

教員からの国際社会における哲学・倫理・道徳への考え方への専門的な見地からの意見や質問に加え、学生からは世界のお金の動きや金融不祥事への興味深い質問や意見が飛び交う金融業界だけではなく国際社会における倫理・道徳までも考えているような交流セミナーでした。

Topic: 6th International Exchange Seminar

Reported by Dr Miki H. K. Bong, Associate Professor, English Education Department, Language Education Center, SGE.

On Friday 10 October 2014, the 6th International Exchange Seminar and the 73rd Fresh Campus Seminar were jointly held at the lecture theater 1 on the first floor of the New Building of the Economy Faculty. The invited speaker was Dr Carlo Cogliati, who is a Managing Director at Barclays responsible for risk management and trading of the counterparty risk for EMEA and Asia (derivatives and loan portfolio). Although he is a leading investment banker, he spoke not as a banker but as an individual and as a friend of the faculty at Shinshu University.

The theme of the seminar was “Thinkers can Survive”, and the title of the talk was “Virtue Ethics in Banking, what do you think?” One of the main intentions of the speaker was to give the audience ‘learning opportunity based on Socratic insights’: “I cannot teach anyone anything. I can only make them THINK.”. Socratic questioning can be used to pursue THOUGHT in many directions and for many purposes including to explore complex ideas, to get to the truth of things, to open up issues and problems, to uncover assumptions, to analyze concepts and so on. The seminar was carried out by Socratic questioning with examples emphasizing importance of why-questions.



The seminar was carried out by Socratic questioning with examples emphasizing importance of why-questions.

The talk introduced the audience to recent scandals such as the LIBOR scandal, FX Manipulation and Dark Pools that have struck the banking system in recent years. Those scandals have called for the need of an ethical dimension within the financial industry. The speaker addressed questions like “Can we have morally good banking?”, “Are Money and Morals at odds?” On ‘Relation between Banking and Ethics’, the speaker distinguished the question ①Is it legal (seen as ethics of obedience), the question ②Is it profitable (as ethics of cares/consequence)? And the question ③Is it right (as ethics of reasons)? One example is: *You have decided to apply for a new job, but you do not have quite enough experience in one key area. However, you decide not to exaggerate your experience because (a) it would be fraud and I could be fired if found out later, (b) if everyone lied, who could we trust?, (c) Honesty is an important principle for me. What would your answer be?* He argued that a synthesis between the two is possible if we focus on virtues and being rather than profits and actions.

スポットニュース

第5回NHK 大学セミナー in 信州大学

『サイエンス ZERO』

広がる「夢」～宇宙の世界をのぞき見よう～

三澤 透 自然科学教育部門 准教授

ストレスを発散せずにとーっとため込んでみましょう。すると、蓄積されたイライラが些細なことがきっかけで大爆発します。しかもそのタイミングは本人にもわかりません。これこそまさに「超新星爆発」です。

そんな絶妙なたとえ話を使い、難解なサイエンスの世界をわかりやすく解説した本を100冊以上も執筆されているのが、日本屈指のサイエンス作家である竹内薫さんです。第5回NHK 大学セミナーの講師として、昨年11月に信州大学にお越しくださいました。

今回のテーマは「宇宙」。関連する教養講義を開講していることもあり、私も講師としてイベントに参加することになりました。あの竹内さん（私自身、熱烈なファンの一人です）との対談ですから緊張しないわけがありません。しかしセミナーが始まると、竹内さんの巧みな話術で会場の緊張感がスッと消えるとともに、夕暮れ時の薄暗い講義室がまるで宇宙空間であるかのような錯覚を覚えるのにそう時間はかかりませんでした。あの時間、確かに講義室は宇宙への夢で溢れていました。

セミナーでは、竹内さんも出演されている『サイエンス ZERO』（日曜午後11:30からEテレで放送）で過去に放送された国際宇宙ステーション(ISS)と、次世代30メートル望遠鏡計画の回が上映されました。昨年は信州初の小型衛星「ぎんれい」が打ち上げられ、今年長野県出身の油井亀美也宇宙飛行士がロシアの宇宙船ソユーズでISSに向かいます。信州と宇宙のつながりの深さを参加されたみなさんと共有することができました。

宇宙に限らずあらゆる分野に精通している竹内さんですから、対談のテーマは実に多岐に及びました。宇宙というテーマが他分野といかに深くかかわっているのかを



次々とお話になるのです。そして私が（おそらく会場みなさんも）最も感銘を受けたのが、「これからは『宇宙学』という分野が必要だ」という一言です。地学と物理学の境界領域にある天文学に、様々な周辺領域（宇宙人探し、宇宙開発、望遠鏡建設の経済学など）を含めた学問分野が、今まさに必要なのだということです。

『宇宙学』—なんと魅力的な響きでしょうか。天文学を専門とする研究者として、宇宙学の立ち上げに尽力したいと思った一日でした。最後に、貴重な機会を下さった、竹内薫さん、NHKの皆様、学生支援課の皆様、参加された皆様に心よりお礼を申し上げます。

全学教育機構南棟の耐震改修工事終わる

全学教育機構耐震改修ワーキング・グループ

大塚 勉

昨年(平成26年)の8月に始まった全学教育機構南棟の機能および耐震改修工事が終わろうとしています。この記事を書いている時点では、もうすでに学務課が新装なった第1講義棟1階に移動して業務を始めているほか、その他の事務部門の移動も間近です。

足かけ8ヶ月にわたる改修工事の間、南棟と講義室の一部が使用できなくなりました。教員研究室は北棟の部屋を複数の教員が共同で使用することとなり、窮屈な状況が続きました。事務部門も北棟の狭いスペースを利用したり、機構建物外に移動する必要が生じました。講義室・演習室の一部が使えなくなり、授業や会議を行う上で支障が生じました。教室や会議室の足りなくなる分、他部局には教室の提供などのご協力をいただきました。

工事期間の講義を予定どおり実施するために、共通教育支援室はいろいろご苦労されました。なによりも学務課、とりわけ総務グループでは、すべての場面でご苦労が続いたことと思います。

今回の改修で、もちろん耐震機能が付加されます。ここでは、機構建物に新たに付け加わった機能や変更点を挙げてみましょう。

学生コミュニケーションスペース

1階入り口のロビー南側に新たに「学生コミュニケーションスペース」が新設されます。これは今回の改修により新たに加わる機能の中で最も重要なものです。機構の正面入り口のロビーの南側に面積103㎡のスペースが用意され、そこには約50人が着席できるテーブルとイスが置かれます。学生たちは、授業の空き時間などにそこで自習したり、語り合ったりすることができます。学修や交流をとおして、学力や人間力がアップすることが期待されます。このスペースは、学生支援課の協力の下、キャリアサポートセンターが移動して生み出されたもので、学生にとって利用しやすい場所を利用することができるようになりました。写真1 学生コミュニケーションスペース



キャリアサポートセンター

学生支援課キャリアサポートセンターは、機構南棟の東端に移動します。これまで同様のカウンターのほか、学生のプライバシーを確保しつつ相談に応じることができるスペースも設置されます。

グローバル教育推進センター教員室

国際交流センターが改組拡充され、グローバル教育推進センターが発足します。それに伴い、これまでのセン

ター長室・教員室・事務室・留学生演習室に加えて、新たに教員室1室が用意されます。

障がい学生支援室

平成28年度から障害者差別解消法が施行されることとなります。それに対応して信州大学にも教員が配置され、障がい学生支援教員室が機構南棟2階に設けられます。

講義室・演習室

これまでにあった南棟の講義室と演習室の配置や面積が大きく変わります。3階32番講義室のパソコン演習室としての機能は廃止され、面積を少し縮小した上で新たな講義室に生まれ変わります。そこは、機構の重要な企画である外国語サロンに対応可能な仕様になります。4階にあった小規模な演習室は廃止され、代わりに教員室が設置されます。同時に、4階には、やや大きな規模の授業に対応できる401講義室が設置されます。

高等教育研究センター等教員室の再配置と新設

高等教育研究センターおよびアドミッションセンター教員室を南棟4階に再配置します。北棟に1室あった高等教育研究センター教員室も、業務の効率化を目指して南棟に用意されます。地域戦略センター教員室も4階に新たに設置されます。教員室の位置は、講義室・演習室の再配置と連動して移動することになります。

講義室の引き戸化

これまで、講義室・演習室の入り口は「開き戸」でした。開き戸は、車いす使用者にとってたいへん使いづらいものです。また、開き戸の場合、室内の机の配置に制約が生じます。講義室・演習室の入り口は「引き戸」に改められます。

トイレ

トイレは全面的に更新されます。これまで南棟の1階にのみ設置されていた「多目的トイレ」が各階に設置されます。トイレは、すべての階で和式・洋式が併設されます。また女性用トイレに隣接して「パウダールーム」が設置されます。

給湯室

今回の改修で、コスト軽減の理由から、教員室には水道と都市ガスの配管がなくなりました。それを補うかたちで各階に給湯室が配置されます。

外観

耐震補強のために建物の外観が変わります。南棟の南面には「アウトフレーム」という鉄骨の枠が付加されます。カバーが付きますので、これまでとはかなり



写真2 完成した南棟（南面）

異なるがっちりとした外観になります。南棟の中庭側には、三角のトラスを含む「鉄骨ブレース」が、場所によってははめ込まれます。

以上が改修によって付け加わった機能と変更点です。総面積を変えられない中で、新たな機能の追加を実現するという困難さがありました。このような形で改修が実現できることになりましたが、各教員、各事務部門のご理解、ご協力があった初めて実現できたものです。最後に、関係各位のご意見を集約して改修工事に反映させる上で、不手際から皆様にはいろいろご心配をおかけしました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

平成27年度の後半には、北棟の改修工事が行われます。工事に際して北棟教員の南棟への移動が必要となります。引き続き落ち着かない期間を迎えることとなりますが、全員の相互理解と協力をもって乗り切りたいものです。

松岡俊裕教授、佐々木寛教授が定年退職

人文・社会科学教育部門の松岡俊裕教授(中国文学)、初修外国語教育部門の佐々木寛教授(ロシア文学、比較文学)が、本年3月31日をもって定年退職されます。松岡俊裕先生は昭和54年より36年間余り、佐々木寛先生は平成3年より23年間余り、それぞれ信州大学に勤務されました。長い間本当にお疲れ様でした。以下に各先生の信州大学着任以降の略歴、主要業績等を掲げます。

松岡俊裕教授 略歴:1979年4月助教授人文学部、2006年4月助教授全学教育機構、2007年3月教授全学教育機構。**業績: 学術論文** 1) 周作人の残した小説創作の軌跡とその意義—「社会小説 江村夜話」の問題を中心として、1977年10月、日本中国学会報第29集 pp. 174-187. 2) 魯迅の祖父周福清攷(1)—その家系、生涯及び人物像について、1991年2月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第114冊 pp. 1-85. 3) 魯迅の祖父周福清攷(2)—その家系、生涯及び人物像について、1991年3月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第115冊 pp. 123-167. 4) 魯迅の祖父周福清攷(3)—その家系、生涯及び人物像について、1992年10月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第119冊 pp. 1-272. 5) 魯迅の祖父周福清攷(4)—その家系、生涯及び人物像について、1993年2月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第120冊 pp. 169-229. 6) 魯迅の祖父周福清攷(5)—その家系、生涯及び人物像について、1993年11月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第122冊 pp. 119-307. 7) 魯迅の祖父周福清攷(6)—その家系、生涯及び人物像について、1994年11月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第125冊 pp. 177-367. 8) 魯迅の祖父周福清攷(7)—その家系、生涯及び人物像について、1995年11月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第128冊 pp. 1-185. 9) 魯迅の祖父周福清攷(8)—その家系、生涯及び人物像につ

いて、1997年2月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第132冊 pp. 85-229. 10) 魯迅の祖父周福清攷(9)－その家系、生涯及び人物像について、1997年12月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第134冊 pp. 73-132. 11) 魯迅の祖父周福清攷(10)－その家系、生涯及び人物像について、1998年3月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第135冊 pp. 31-94. 12) 魯迅の祖父周福清攷(11)－その家系、生涯及び人物像について、1999年3月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第137冊 pp. 111-148. 13) 魯迅の祖父周福清攷(12)－その家系、生涯及び人物像について、2000年12月、東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第140冊 pp. 157-206. 他25件. **研究ノート** 周作人詩話5、1999年3月、信州大学人文学部『人文科学論集』第33号 pp. 321-339. 他5件. **翻訳** 樹人(魯迅)「玻璃の精霊」(付・解題)、1976年10月、筑摩書房『文芸展望』第15号 pp. 260-273. 他5件. **書評** 周作人の幻の随筆集一『飯後随筆』と『木片集』一、1995年7月、東方書店『東方』172pp. 32-35. 他4件.
座右の銘 あきらめないー継続は力なり、樹人百年。

佐々木寛教授 略歴：1991年10月信州大学教養部助教授、1995年4月人文学部助教授、1999年6月同教授、2006年4月全学教育機構教授。**業績**：**学術論文** 1) ゴーゴリ『死せる魂』－第一部テキストの叙述の構造、早稲田大学文学部『ヨーロッパ文学研究』第26号、1978年12月、pp. 1-21. 2) ブルガーリンの小説『イワン・ヴィジギン』(1829)について－風刺・教訓ジャンルの問題、早稲田大学大学院『文学研究科紀要』別冊9集、1983年3月、pp. 211-219. 3) ナレーズニの小説『ロシアのジル・ブラース』(1814)について、早稲田大学文学部『ヨーロッパ文学研究』第31号、1984年3月、pp. 99-111. 4) 日本におけるバフチンの移入について、日本比較文学会『比較文学』第31号、1989年3月、pp. 99-114. 5) ロシアにおけるダンテ概観－『神曲』を中心に、國學院大學『國學院雑誌』第90巻第11号(ダンテ特集号)、1989年11月、pp. 226-240. 6) バフチンにおける「声」の問題、新谷敬三郎教授古希記念論文集『交錯する言語』、名著普及会、1992年3月、pp. 367-387. 7) バフチンと一九二〇年代前半のロシア、ミハイル・バフチン全著作第1巻、伊東一郎・佐々木寛共訳、水声社、1999年2月、pp. 501-527. 8) バフチンのテキスト理論の根底にあるもの、信州大学人文学部論集(文化コミュニケーション学科編)第33号、1999年3月、pp. 169-189. 9) Bakhtinistika v Japonii za poslednie 15 let [最近15年間の日本におけるバフチン研究]、Proceedings of the XII International Bakhtin Conference (Juväskylä, Finland, 18-22 July, 2005), Mika Lähteenmäki, Hannele Dufva, Sirpa Leppänen & Piia Varis (eds.), University of Juväskylä, 2006,

pp. 126-135 【CD-ROM】. 10) 『禽獣』はいかにつくられているか、川端文学研究会編『川端文学への視界』No23、2008年6月、pp. 86-97. 11) 「金糸雀」はいかにつくられているか、川端康成学会編『川端文学への視界』No27、2012年6月、pp. 39-49. 12) 桑野隆『バフチン』(平凡社新書、2011年)を批判的に読むーバフチン研究の死点克服のために、信州大学人文科学論集 第49号、2015年3月、pp. 273-286.
翻訳書 1) ミハイル・バフチン著作集第7巻『叙事詩と小説』、川端香男里・伊東一郎・佐々木寛共訳、新時代社、1982年2月. 2) 同、第2巻『作者と主人公』、斎藤俊雄・佐々木寛共訳、1984年12月. 3) 同、第3巻『文芸学の形式的方法』、桑野隆・佐々木寛共訳、1986年11月. 4) 同、第8巻『ことば対話テキスト』、新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛共訳、1988年3月. 5) ミハイル・バフチン全著作第1巻(一九二〇年代前半の哲学・美学関係の著作)、伊東一郎・佐々木寛共訳、水声社、1999年2月 [「芸術と責任」、「行為の哲学によせて」、「美的活動における作者と主人公」および解説「バフチンと一九二〇年代前半のロシア」を担当] 6) 同、第5巻(一九三〇年代以降の小説ジャンル論)、伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也共訳、2001年4月 [「教養小説とそのリアリズム史上の意義」を担当] 7) 同、第2巻(一九二〇年代後半のバフチン・サークルの著作I)、磯谷孝・佐々木寛共訳、2005年1月 [メドヴェージェフ「学問のサリエリ主義」、同『文芸学の形式的方法』を担当]

公開講座 土曜市民教養教室を終えて

平成26年9月～11月(9及び10月2回、11月1回、計5回)にかけて標記公開講座7コースを開講し、延べ103名の方々に受講頂き、盛況のうちに終了することができました。後期は機構棟南校舎の耐震改修工事のため第2講義棟での開講になりました。

平成26年度共通教育グッドプラクティスについて

平成26年度テーマは「地域課題実践授業の試み」でした。後期は林靖人准教授(地域戦略センター)の「地域ブランド実践ゼミ」が採択され、1月27日に組み発表会及び表彰式が行われました。林先生、おめでとうございます。

1頁「SGE随想⑬」の注.

¹ 柴田錬三郎「首相は空を仰げ」『地べたから物申すー眠堂醒話』、新潮社、1978年、112頁。

² 同書、112頁。

³ 同書、113-114頁。

⁴ 九鬼周造『「いき」の構造 他二篇』、岩波書店(文庫)、1990年、95頁。

⁵ 柴田「滅びには美学がある」『地べたから物申すー眠堂醒話』、76頁。

私の研究 XIII

ロシア文学者、文芸学者としてわたしのしてきたこと

佐々木 寛 初修外国語教育部門 教授

わたしが早稲田の文学部に入学したのは1969年の春、東大の入試が無かった年です。京都大学の文学部をめざして京都で浪人生活を送るなか、年が明けても東大の封鎖が続いて、入試の中止が言われ始め、東大受験生の多くが京都大学の受験にまわることが予想されるなかで、願書締切の2週間前になって初めて早稲田の過去問題に目を通して出願し、受験したのです。(機動隊の厳戒警備の下、京都市内の予備校会場で受けた京都大学文学部の入試はあえなく不合格。この時の合格者200名の中に、のちに信州大学人文学部比較文学分野で同僚となる下田立行さんがいた訳です。)

そんな次第で、露文科に進級することになるロシア語クラスを選んだのも、どんな先生方がいて何を研究しているかといった次元の話ではなく、早稲田の文学部ならば露文かな、という程度の漠然としたものでした。まあ要するに、文学がやりたかった訳です。ただそれでも理由らしきものを強いてあげるとすれば、高校の時にソビエトのバレエ映画を観にゆき、その際に耳にしたロシア語の響きが美しかったのと(バイカル湖の観光宣伝フィルムでした)、小林秀雄が或る対談のなかで、韻文をやるならばフランス文学、散文ならばロシア文学と言っていたことでしょうか。

1970年の日米安保条約改定阻止をスローガンに、全共闘運動の主要な舞台が東大、日大から早稲田へと移って来るなかで、ロシア語の文字と発音を習い、動詞の人称変化、そして名詞の格変化を教わり始めた矢先の5月19日に、文学部の学生大会で無期限ストライキ案を可決、同夜の全共闘による文学部自治会室襲撃で火炎瓶が頭上を飛び交う様は衝撃的でした。その後、全学のバリケードストライキに入って、5ヶ月間ずっと授業の無い状態が続きました。10月下旬に大学側が封鎖を解除、機動隊を張り付けて授業が再開されましたが、そういう状態で大人しく授業を受ける訳にはいかず、他にもいろんな事があってそのまま1年間休学。1971年にもう一度1年生からやり直すことになりました。

ロシア・フォルマリズムや構造主義の文学理論、吉本隆明や時枝誠記の言語論が、学生同士のおしゃべりの種になっていたのはこの頃で、ミハイル・バフチンの『ドストエフスキー論』(1968年邦訳、原本は1963年モスク

ワ刊)を73年夏にわたしが読んだのも、そうした流れの中でのことでした。少しずつ読み進めていって全編を読了するのに丸1ヶ月を要したのは、自らの文学観の根本的な転換を迫られたからなので、この本を読み終える頃には、文学の研究を、作品を構成する言葉の問題として行なうことが可能なのだという確信のようなものができあがっていました。

訳者の新谷敬三郎先生の授業は学部2年の時から受けていて、ゴーゴリを卒業論文に選んだのも3年のロシア文学演習のテキストがきっかけだったのですが、先生と親しく話すようになったのは、1975年4月に大学院に進んで新谷ゼミの院生になってからでした。この年の12月に研究同人誌に載せたバフチン「ラブレーとゴーゴリ」の翻訳を、先生が評価して下さったことが、ちょうど企画が進んでいたバフチン著作集の仕事に自分がたずさわることになりました。

ヴォロシノフとバフチンの合作である『マルクス主義と言語哲学』(1929年)の邦訳が1976年に出たことも、自分にとっては大きな意味を持ちました。「記号の了解とは、了解されるその記号を他のなじみの諸記号に関係づけることであり、換言すれば、了解は記号に応答するわけだが、それはやはり記号によってなのである。」(第1部第1章)「言葉は、あらゆるイデオロギー的行為に随伴し、それを注釈する。いかなるイデオロギー的現象(絵画、音楽、儀式、しぐさ)といえども、その了解の過程にはかならず内言がともなっている。」(同)この内言の問題を理解するために『思考と言語』(1934年)を始めとするヴィゴツキーの著作の邦訳をほとんどすべて読み、バフチンのドストエフスキー論、ラブレー論の根底にあるその独自の言語哲学について認識を深めることができました。

修士論文で取り組んだのはゴーゴリの『死せる魂』で、提出するまでに3年かかりました。論文のタイトルは「ゴーゴリ『死せる魂』——第一部テキストの叙述の構造」で、テキストを、語り手と物語世界の関係の観点から分析したものでした。十全と言うにはほど遠い内容でしたが、とにかく自分の研究方法を打ち出すことができ、研究者としてやってゆく自信がようやくもてました。28歳でした。(修士論文をコンパクトにまとめて活字にしたのが早稲田大学文学部『ヨーロッパ文学研究』第26号、1978年に発表した同タイトルの論文で、これは信州大学人文学部の授業で作品分析を行なう際に受講者にあらかじめ小説の語り手の問題を理解させるためのテキストとして役立ちました。)

『死せる魂』の作品分析を行なってみてわかったのは、ゴーゴリのこの作品が、ホメロスを始め、ダンテ、フィールディング、プーシキンその他の作品をふまえて書かれていることでした。先行作品の文体のパロディ、文体のカーニバルとでも言うべき遊戯の精神にみちた叙述が



随所で繰広げられていて、通常の小説の枠組みには収まり切らないこの作品のジャンル意識について、あらためて考えさせられました。そこで、この作品がしばしば帰せられるピカレスク小説ジャンルのロシアにおける流れをおさえるべく、ゴーゴリの先行者ナレージヌイの長篇小説『ロシアのジル・ブラース』(1814年)を読んでみて、この作家が基本的には18世紀後半ロシアの啓蒙主義の散文文学の系譜に連なるものであることがわかりました。そこからロシアのルソーイズムの問題に着目して、同じく孤児の主人公がロシア社会の裏側を遍歴してゆくブルガーリンの、風刺と教訓の長篇小説『イワン・ヴイジギン』(1829年)について論文を書き、続いてナレージヌイ『ロシアのジル・ブラース』についての論文を発表しました。国の柱であるべき地主貴族が、虚飾と歓楽にみちた都会の生活にうつつを抜かしているのは国が滅びる。地主貴族は田舎で自ら領地の経営にあたることでロシアの国を支えるべきである、とするロシア・ルソーイズムのイデオロギーは、ゴーゴリが1847年に公刊して物議をかました『友人との往復書簡抜粋』にも色濃くあらわれているもので、ゴーゴリを論じるばあいに避けて通ることのできない問題です。こうして、博士課程に在籍するあいだに何本かの論文を書くことができました。

指導教員の信谷先生が折にふれてわれわれゼミ生に説いていた研究者の心構えは、要約すると以下のようなものでした。

①ロシアの文学、文化の問題は、ロシアと日本をじかに結びつけて考えるのではなく、ロシアとヨーロッパと日本の三者間の関係で考えること。

②何のための外国文学研究かということ。日本人であるわれわれが外国の文学、文化を研究するのは、日本の言語文化を豊かにするためである。

③論文の執筆は、数学の証明問題を解く要領で行なうこと(その問題を論ずるために何と何をおさえておく必要があるか、これこれの前提からどういうことが言えるのかetc.)。

④大切なのは、問題を解くことではなくて、問題を正しく立てることである。問題が正しく立てられたとき、すでにそこに答えが含まれている。

⑤論文を書くために必要なのは、知識の量ではなくて腕力である。下らない勉強はするな。

大学院の奨学金で家賃と食費をまかなっていたのが、1981年春で支給が切れることになり、やむなく、その年の1月から、バフチン著作集を出していた出版社の編集部で働くことになりました。1982年4月から84年3月までの2年間、早稲田大学露文科の助手を務めた期間をはさんで、1991年10月に信州大学教養部のロシア語教員に採用されるまでの10年間、東京圏の諸大学でロシア語の非常勤講師をしながら、編集の仕事が続けました。バフチン著作集の仕事は、自分の訳した原稿を自分で割

付して組版・校正を行ない、印刷・製本にまわして、新聞雑誌の広告手配をするといった按配でした。ロシア語の研究文献を読むことができなくなり、仕方なく日本語の本ばかり読んでいました。8点ほどの本を自分で作って、最後の頃には書店で手にした本のコスト計算ができるくらいになっていました。バフチンの翻訳をすることでかろうじて研究者の体裁は保っていましたが、18~19世紀ロシア文学の研究者としてはもう駄目になっていました。

1988年春にバフチン著作集全8巻を完結させた後、教員公募に必要な研究業績を稼ぐために以下の論文を書きました:「日本におけるバフチンの移入について」(『比較文学』31号、1989年3月)、「ロシアにおけるダンテ概観—『新曲』を中心に」(『國學院雑誌』第90巻11号、1989年11月)「バフチンの出発点—草稿「行為の哲学」について」(『現代思想』1990年2月号)。

信州大学に着任してすぐに、新谷敬三郎先生古希記念論集の論文執筆にとりかかりました。『交錯する言語』(名著普及会、1992年3月)に発表した論文「バフチンにおける「声」の問題」は、いろいろな方々から評価をいただきました。1995年春に教養部が廃止されて人文学部に異動。教授昇格に必要な論文を2本、1999年2月に「バフチンと一九二〇年代前半のロシア」(水声社ミハイル・バフチン全著作第1巻の解説)、3月に「バフチンのテキスト理論の根底にあるもの」(人文学部紀要)を書くまで、新たなバフチン著作集の企画が進行中だったとはいえ、92年の論文のあとに翻訳をのぞいてまとまった研究業績が1つもないのは、やはり長期間の空白が研究生活に生じたためでした。

ただそれでも国際的なバフチン研究誌《Dialog, Kar-naval, Khronotop》の編集スタッフに1995年から名を連ねて、モスクワ(1995年)、ヴィテプスク(1995年、98年)、グダンスク(2001年)、ユヴァスキュラ(2005年)の国際バフチン学会に出席し、さらに折々にモスクワとサンクトペテルブルグを訪れて、ロシアの最も優れたバフチン研究者たちと親しく交わる機会をもてたのは幸いでした。

2006年4月に全学教育機構が発足して再び異動することになりましたが、2015年3月に定年退職するまでの15年間、人文学部比較文学分野の授業で、前期は拙訳のバフチン「美的活動における作者と主人公」を読んで文学理論の諸問題を原理的に考察し、後期はバフチンの小説言語論を応用して日本近代の中篇・短編小説を Semester で10本分析する授業を続けました。『「鼠小僧次郎吉」を読む』(岩波書店の芥川龍之介全集月報、2007年11月)、『「禽獣」はいかにつくられているか』(川端文学研究会編『川端文学への視界』No23、2008年6月)、『「金糸雀」はいかにつくられているか』(同、No27、2012年6月)は、そのささやかな成果です。

チャレンジ教育 13

認知言語学をいかに英語教育に応用するか？

花崎 一夫 英語教育部門 准教授

私は英語教育部門に属しており、認知言語学と英語教育を専門として研究をしておりますが、機構での授業の内容は英語教育が中心となっています。私自身の教育の主要なテーマは、いかに学生の英語学習に対するモチベーションを高めるかという



ことです。特に昨今、学生のレベルの多様化が問題になっており、高校までに十分な学習をしてこなかったために、基本的な英語力が不足している学生が多く見受けられます。そういう学生は知識として英語を暗記しなさいと教えられてきたために、英語学習に対する興味を失っており、結果として実力不足に陥っているという場合が多いのです。そこで、英語の学習は丸暗記が中心ではなく、どのような英語の法則も「説明」が可能であり、一度その説明原理を理解してしまえば、自らの確固たる知識として定着するものであるということを知りやすく教えるようにしています。ではその「説明原理」とはどういうものなのか？具体例を見ていきたいと思います。

一般的に英語の可算名詞は「数えることができるもの」すなわち one diamond, two diamonds, three diamonds のように表現可能なものがそれにあたると言われていています。一方、不可算名詞は、複数であることを認知するのに必要な分離性 (discreteness) を備えていない名詞、すなわち *one gold, *two gold(s), *three gold(s) と表現することができない gold のような名詞のことをいうと定義することができます。しかし、英語学習の観点からは、この定義を覚えたからといって、名詞の分類ができるようになり、実際にその運用がスムーズにできるようになるわけではありません。つまり、この世の中にはもともと2つの種類の名詞が存在していて、それは上記のように定義づけられると考えることには問題があるのです。以下、もう少し具体的に見てみましょう。

(1) a. You need **a lot of lake** for a speedboat race.

b. I want two lemonades and **a water**.

高校までの英語教育の中では、おそらく lake (湖) は可算名詞、water (水) は不可算名詞と教えられることになると思いますが、(1)においては lake が不可算名詞、water が可算名詞として用いられており、一般的な常識とは逆になっています。もちろん(1)の例は正しい英語の用例です。どうしてこのようなことが起こっているのでしょうか。まず、(1a)の例から考えると、ここでの lake は境界のはっきりした数えることができる「湖」でなく、境界のないかたまり (mass) として、すなわち数えることができないものとして捉えられていることになりま

す。一方(1b)の例は、water を境界のないかたまりとしてとらえているのではなく、一杯の水 (グラスに入った水) を表しているので可算名詞扱いになっていると言えます。別の言い方をすれば、water という名詞でメトニミー的に一杯の水を表しているということになるでしょう。

このように、名詞にはもともと2種類がある、すなわち世の中に存在するものを表す名詞は2種類に分類できる、という考え方では正しい英語の運用ができるようにはならないわけです。重要なのは、我々人間が状況をどのように捉えるかによって、名詞は可算名詞としても不可算名詞としても捉える事ができるということなのです。認知言語学的視点に立てば、不可算名詞と可算名詞の間にはっきりとした境界線があるとは考えないわけで、同じ名詞でも可算名詞と不可算名詞ではとらえ方 (意味) が異なるということになります。では、理解を深めるためにもう一つだけ例を見てみましょう。

(2) By mashing **a dozen potatoes**, you get **enough potato** for this recipe.

この例では potato (ジャガイモ) という名詞が、可算名詞と不可算名詞の両方として使われています。もうおわかりかと思いますが、前半の a dozen potatoes は12個のジャガイモということで、境界のはっきりした数えられるジャガイモをイメージすればいいのです。一方、後半の enough potato はといえば、料理の材料としての十分な量のジャガイモを表しており、数えられないもの (材料という物質) としてジャガイモを捉えていることになります。

ここでは英語の可算名詞と不可算名詞について考えてきましたが、英語学習は単なる丸暗記では不十分で、現象の背後にある説明原理を理解することが重要であることがわかったと思います。私の授業ではなるべくこのような説明原理を学生に提示することを通して、英語は暗記の対象ではなく理解するものであるということ、授業を通じて体感してもらっています。授業アンケートでは、英文法に対するアレルギーが減ったというような声も多く聞かれるようになってきているので、地道ではありますが、こういった教育を通じて、少しでも学生が抱えている英語に対するアレルギーを減らすことができれば幸いです。

☆☆☆☆☆

信州大学全学教育機構ニュースレター

第13号

(2014年10月—2015年3月期)

2015年3月28日

編集：SGE 広報・情報委員会

発行：信州大学 全学教育機構

School of General Education, SGE

〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1

URL: <http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general>